

# 新しいかたちの 農業スタイルを提唱

「大戸洞舎」代表理事・松本茂夫さんの取り組み

## 面白い人材を集めて 新しい農業を創造

山里の手つかずの自然がそのまま残される緑深き山間に、松本さんが経営する「大戸洞舎」があります。建築関係の仕事をしながら農業を手がける兼業農家だった松本さんが、本格的に農業を志すようになったのは今から三年ほど前のことです。

「都会化されて、後継者不足が大きな課題となっています。将来的な展望を持たないまま農業を続けても、若い人たちは見向きもしてくれません」と松本さん。農地や農道、水路などを集落単位で共同利用する水田型農業というのは、地域社会との密接なつながりのもとで成り立っているのだといいます。農業が衰退すれば、共有地を整備・管理する人がいなくなり、地域社会そのものが荒廃してしま

湖北町の山間部で農業を営む松本茂夫さん。

二年前に農事組合法人「大戸洞舎」を設立し、

地域に根ざしたユニークな農業活動を行っています。

このコーナーでは、

日本の農業が抱えるさまざまな問題と向き合い、

後継者育成や地域活性化に努力する

松本さんの取り組みを紹介します。

うからです。

松本さんは「これまでの家族経営的な農業スタイルではなく、面白い発想・意欲を持った人材を集めて、何か新しい農業が起こせないか」と考えました。そこで、大阪市で開かれた「ファーマーズフェア」（日本農業法人協会主催）に出展して新規就農者を募ったところ、全国から七名の応募がありました。

「農業に対して前向きな人ばかりでしたが、最終的に最も熱心でやる気のある若者を採用しました」と言うように、松本さんの眼鏡にかかったのは、自称「野良リーマン」という佐藤好伸さん。東京出身で農業の経験はなかったそうですが、豊かな自然の中で新しいことにチャレンジしたいという思いから、大学卒業後、環境関係の専門学校を経て、湖北町へと移ってきました。

住み慣れた都会生活を離れることに

「大戸洞舎」代表理事・松本茂夫さん

は、なんの迷いもなかったといえます。「当たり前なことなんです、夏は暑く冬は寒いんですよ（笑）。でも、東京では味わえなかつた四季の移ろいを肌で感じられるし、何よりも収穫のときの喜びは最高ですね」と佐藤さんは口元をほころばせました。今では農作業も手慣れたもの。松本さんも、「彼なりに信念を持って新しい農業を模索しています。いい後継者ができました」と、佐藤さんの仕事ぶりを高く評価しています。

## 消費者に顔が見えるモノづくりを目指して

松本さんが後継者育成とともに力を注いだのが、家族的経営からの脱却、すなわち「農業経営の法人化」でした。法人化することによって、経営理念や目的、



佐藤好伸さん

経営形態、財務収支などが明確になる上、社会的な信用も得ることができると考えました。法人化の手段としては、株式会社や有限会社を設立するのが一般的ですが、松本さんはあえて組合員が共同出資して会社の経営方針などを決める「農事組合法人」を選択しました。

「社長と社員という立場ではなく、若い人たちと一緒に農業をやっていくんだという意思表示を込めているんです」。法人名の「大戸洞舎」というのは、松本さんが住んでいる上山田の地域名からとったもの。長い間、笹が生い茂って荒れ放題の農地だったそうで、「日本の農業を象徴する存在として、私たちの胸に刻み込んでおくために、あえてこの名を法人名にすることに決めました」とその経緯を話してくれました。

大戸洞舎の経営理念は、やはり「消費者に顔が見えるモノづくり」。これまでの流通形態とは異なった、消費者参加型の生産・販売を目指しているといえます。現在、生産活動の主流となっているのは、滋賀県が規定している「環境こだわり農産物」の基準をクリアした減農薬・減化学肥料栽培の米。「上山田地域は、昼夜の温度差が大きくて水もきれいでおいしい。米を育てるのにいい条件が揃っているんです」と松本さん。味わいが良いと消費者からの反応は上々で、販売とともにすぐに売り切れてしまうほどの人気だとか。京阪神だけでなく、東京方面の消費者向けにも出荷しています。



松本さんたちの手作りによるゲストハウス。ここがさまざまな活動の拠点となっている。出迎えてくれるのは大戸洞舎のかわいいアイドル、羊のいとっさん&こいつさん（写真上）



通して消費者にうれしいはちみつを提供できるようにしたいですね。将来的には、手づくり味噌やはちみつの加工所を敷地内に開設して、生産量をどんどんと増やしていきたいと話してくれました。

## 定期イベントを開催して、消費者とのふれあいを推進

大戸洞舎では、農業以外にも養鶏などにも力を注いでいます。鶏の飼料となるのは、刈り取った雑草や大戸洞舎が育てた栄養たっぷりの米ぬかや大豆、とうも



大戸洞舎の活動報告やイベント告知が満載の「大戸洞舎通信」。定期的に発行され、地域の人々や一度イベントに訪れた方などに配布・郵送される



「一度食べたらやみつきになる」と評判の『手作りれんげはちみつ』。残念ながら今は生産数に限りがあるため、「すべての購入希望者に行き渡らないのが申し訳なくて」と松本さん

るこしなど。狭いケージではなく、青空の下で伸び伸びと育てているのが自慢です。現在のところ、収穫した卵は地域内の消費者に販売しているのですが、こちらのほうも加工物と同じように、鶏の数を増やして生産量を増やしていきたいといいます。また、昨年には二匹の愛らしい羊が仲間入り。「大戸洞舎のアイドルなんです。性格も温厚で人なつっこいので、今後は羊の毛刈り体験なんかも考えていきたいですね」と夢は膨らむ一方です。

そのほか、消費者とのふれあい促進を目指して、さまざまな活動にも取り組んでいます。毎年九月に「収穫祭コンサート」と銘打った交流会を開催し、ピアノやギターの賑やかな演奏を繰り広げているほか、収穫したばかりの枝豆や山菜、自慢の米で作った焼きおにぎり、また、「溪流釣りの好きな友達が持つて来てくれる」というイワナ、湯豆腐やせんざいなどがふるまわれます。今年も総勢七十名ほどの参加者が地域内外から訪れ、ふだんは静かな山間もこのときばかりは楽しそうな歓声がこだましました。それ以外にも、さまざまな収穫体験や試食交流会などを開催しています。交流会の参加者から「こんなにおいしいものなら毎日でも食べたい!」と、こうしたイベントをきっかけに注文が舞い込むことも少なくありません。「大自然の恵みを味わいながら、少しでも農業の素晴らしさを実感してほしいんです」と松本さん。年に二〜三回、自分たちの生産活動や栽培りポート、農作物の様子などをまとめた「大戸洞舎通信」を消費者や地域の人た

# 松本さんを応援しています!

清水 幸 男さん(湖北野鳥センター専門員)

## 遊び心と チャレンジ精神に共感

今、日本の農業は危機に直面しています。わずかな収穫量で経営を続ける山間部の農家はどんどん淘汰され、後継者不足にも悩まされています。そんな中で、松本さんは、上山田地域に

「モノづくり」を心がけています。毎年、たくさんの方の参加を集めて開催される収穫イベントや炭焼きバーベキュー大会、夕涼みコンサートなどは、松本さんの農業に対する姿勢を具現化したものといえるでしょう。

だわり、これまでの家族経営の農業をあらため、都会からやる気のある若者を募り農事組合法人「大戸洞舎」を設立しました。やる気のある若者を農業に引きつけようと思えば、農家を営むほうにも明確な将来ビジョンと情熱、夢がなければなりません。松本さんは、消費者のもとに商品が届くまでに何日も、何カ月もかかる既存の流通システムではなく、自分たちが作ったものを消費者に直接販売できる「顔の見える

もう一つの特徴は、米の生産のみにこだわっていないことです。将来的に米の消費販売量が低下していくことが予想される中で、大豆やそばなどの多角栽培、あるいは手づくり味噌やれんげはちみつの生産など、顧客のすそ野を大きく広げることに努力しています。山間部の農業を継続させていくためには、それこそ真剣になって努力していかなければなりません。ほんの少しの遊び心とチャレンジ精神が大切だということを、松本さんの活動を通して感じています。

ちに向けて配布するなど、啓発・広報活動にも積極的に取り組んでいます。

## 里山の保全と 育成に努力

もう一つ、松本さんが活動の柱に据え



取材当日はピーナツの収穫期。これも今後の主力商品になる



ているのは、「里山の保全と育成」です。これまでも間伐材を再利用して、ゲストハウスや堆肥小屋、鶏や羊たちの小屋を手づくりで建ててきたという松本さん。特に、ゲストハウスは木の温もりにあふれたくつろぎの空間で、とても手づくりとは思えないほど立派なものです。今では大戸洞舎を象徴する存在となっています。

「農業活動というのは、田んぼだけで成り立っているわけではありません。田んぼと境界を接する『里山』が失われれば、農業もまた失われてしまうのです。里山の景観を守ることが私たちの使命だと思っています」。松本さんは、里山の問題は地域全体の問題と考え、山林関係

者や里山に関心を持っている地域の仲間などとともに、二年前の春に「ほっこりおせんどさん・山里の会」を結成しました。「ほっこりおせんどさん」とは上山田地域の方言で、「ほんとうにお疲れさん」というような意味。毎年、里山会議を開催して、農山村の活性化や里山の保全について議論しているほか、一般の人たちにも呼びかけて炭焼きバーベキュー大会やキノコ採り、夕涼みコンサート、



「山菜採りと食事会」「収穫祭」などのイベントを定期的開催。「これらに参加してもらったことをきっかけに、山間部の農業ならではの魅力に興味を持ってもらえれば」と佐藤さん

松本さんたちのこうした活動は、地域社会の農業への関心を高めることにもつながりました。荒廃していた農地の整備が行われ、農業を中心に地域を活性化していくという動きも広がっています。また、後継者不足に悩む地方の農業関係団体などから、新しい農業スタイルとして注目されるようになり、遠方からわざわざ視察に訪れる方々も増えてきました。「今はまだ農作物が中心ですが、

落語会、野鳥や動物たちの写真展など、多彩な活動を通して里山への関心を高めてもらおうと努力しています。



#### DATA

農事組合法人・大戸洞舎

滋賀県東浅井郡湖北町上山田

松本さんが代表を務める

「ほっこりおせんどさん・山里の会」のホームページ

<http://wing.zero.ad.jp/~zbi51495/index.html>

この上山田地域で生活に必要なさまざまなものが生産できて、それがやがてコミュニティとして周辺地域に広がっていく。そんな農村の将来像を描いているんですよ」と松本さん。その上、都会に住みながら「農業をやりたい」という若者の指導や育成などもさらに手がけていきたいと話します。

山間部の農業そのものの在り方を見直し、これまでにない新しい消費者参加型の農業を取り入れて地域活性化を進める松本さん。そのユニークな取り組みは、日本の農業が抱えるさまざまな問題を解決するための一つの糸口として期待されています。